

国

語

(  
解答番号

1

5

37

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 11 の番号を付してある。

(配点 50)

1 ネット上で教えを<sup>(ア)</sup>タれる人たちは、特にある程度有名な方々は、他者に対して啓蒙<sup>けいもう</sup>的な態度を取るということに、一種の義務感を持つてやつてらっしゃる場合もあるのだろーと思います。僕も啓蒙は必要だと思うのですが、どうも良くないと思うのは、ともするとネット上では、啓蒙のベクトルが、どんどん落ちていくことです。これはしばしば見られる現象です。たとえば掲示板やブログに「〇〇について教えてください」などという書き込みをしている「教えて君」みたいな人がよくいます。が、そこには必ず「教えてあげる君」が現れる。自分で調べてもすぐにわかりそうなのに、どういうわけか他人に質問し、そして誰かが答える。そして両者が一緒になって、川が下流に流れ落ちるように、よりものを知らない人へ知らない人へと向かってしまうという現象があり、これはナンセンスではないかと思えます。<sup>(注1)</sup> ツイッターでも、ちよつとしたつぶやきに対して「これこれはご存知<sup>ぞんじ</sup>ですか？」というリプライを飛ばしてくる人がいますが、つぶやいた人は「教えてあげる君」に教えられるまでもなく、それは知っていて、その上でつぶやいたのかもしれない。だから僕はA「教えて君」よりも「教えてあげる君」の方が、場合によっては問題だと思えます。自分より知識や情報を持っていない方に向かうよりも、自分が知らないことを新たに知ることができる方向に向かっていった方がいいに決まっている。啓蒙するよりも啓蒙される側に回った方が、自分にとって利があると思うのです。

2 ところで、ではどうして自分が考えたことをすでに考えた誰かが必ずといっていいほど存在するのか。それは要するに、過去があるから、大袈裟<sup>おおげさ</sup>に言えば、人類がそれなりに長い歴史を持つているから、です。もちろん今だって新しい発想や知見が生まれているわけですが、いろいろな分野において、過去のストックが、ある程度まで溜<sup>た</sup>まってしまった。だから何らかの事柄にかんして考えてみようとする、<sup>(イ)</sup>タイガイは過去のどこかに参照点がある。しかしわれわれは過去のすべてを知っているわけではない。だからオリジナルだと思つてリヴァイバルをしてしまうことがある。それゆえに生じてくる問題にいか

対すればいいのか。

3 単純な答えですが、順番はともかくとして、自力で考えてみると、過去を参照することを、ワンセットでやるのがいいのだと思います。<sup>(注2)</sup> 先ほども言ったように、知っていることとわかつていることは別物なのだから、独力で理解できた方が、他者の言説を丸呑み<sup>まるの</sup>するよりもましに決まっています。しかしその一方で、人類はそれなりに長い歴史を持っているので、過去には思考のための<sup>(ウ)</sup>ジュンタクな資産がある。それを使わない手はない。だから自分が考えつつあることと、他人が考えたことを、どこかのタイミングで突き合わせてみればいい。そうすることによって、現在よりも先に進むことができる。

4 <sup>(注3)</sup>「君の考えたことはとくに誰かが考えた問題」と、ちよつと似ていますが、盗作、パクリをめぐる問題というものがあります。これは多くのひとが気付いていると思うのですが、ある時期以後、たとえば音楽においても、メロディラインが非常に似通った曲が頻出し、しかもそれがヒットしてしまったりするという現象が起つてきました。僕は意図的な盗作よりも、むしろ盗作するつもりなど全然なくて、つまりオリジナルを知らないのにもかかわらず、なぜかよく似てしまう、そのことの方がむしろ問題だと思えます。

5 人類がそれなりに長い歴史を持っているということは、当然ながら人類は、これまでに沢山の曲を作ってきたわけです。メロディも沢山書いてきた。だから誰かがふと思いついたメロディが過去に前例があるということは、確率論的にも起き易く<sup>やす</sup>なっていることであつて、ある意味で不可避だと言つてもいい。新しいメロディが、なかなか出てこないということは、それだけ過去に素晴らしいメロディが数多く紡ぎ出されたということです。それは別に悪いことではない。もちろん **B** メロディを書くこととする音楽家にとつては、これはなかなか厳しい問題かもしれせん。でも、「君の考えたことはとくに誰かが考えた問題」と同じように、自分で考えたということは自分にとっては意味のあることだけれど、それでも何かに似てしまうということとはあり得る、という<sup>(エ)</sup>タンテキな事実を認めるしかない。自分の口ずさんだメロディが、見知らぬ過去の誰かによつて<sup>(オ)</sup>カナでられていたとしても、めげる必要はない。でも、それを認めることは必要です。知らなかったんだから何が悪い、誰が何と言おうとこれは自分のものだ、ということではない。知らないより知っていた方がいい、でも知らなかったこ

と自体は罪ではない、ということです。

6 意識せずして過去の何かに似てしまっているものに、誰かが気付いて「これって〇〇だよ」という指摘をする。それを自身<sup>自身</sup>の独創だと思っていた者は、驚き、戸惑う。しかしその一方では、意識的な盗作をわからない人たちもいるわけです。明らかに意識的にパクッているのだけれども、受け取る側のリテラシーの低さゆえに、オリジナルとして流通してしまう、という<sup>(注5)</sup>こともしばしば起こっている。それが盗作側の利益になっていたりするならば、やはり一定のリテラシーが担保されなければならぬと思います。けれども、無意識的に何かに似てしまうというのは、これはもうしょうがないことだと思います。人類はそれなりに長い歴史を持っているのだから。

7 以上のような問題はいずれも、累積された過去と呼ばれる時間の中で、さまざまなことが行<sup>おこ</sup>なわれてきてしまった、すなわち「多様性」が、ある閾<sup>(注6)</sup>値を超えてしまったということから生じています。何かをしようとした時、何事かを考えはじめようとした時に、目の前に立ちはだかってくるもの、あるいは視線の向こう側に見えてくるものが、あまりにも多過ぎて、どうにもげんなりしてしまう。しかしそれを無視することはできないし、だったら知らなければいいということでもない。しかしだからといって、それらは今、突然、一気に現れたわけではありません。これまでに短くはない時間が流れてきたがゆえに、つまり人類がそれなりに長い歴史を持っているがゆえに、それだけ多くのコト／モノが積み重なったということに過ぎない。しかし、われわれが「多様性」を、何らかの意味でネガティブに受け取ってしまうのは、時間の流れとは別に、それがひと塊のマス(量)として、いきなり自分の前に現れたかのように思えるからではないでしょうか。それはナンセンスなことだと思うのです。

8 われわれは、ある事象の背後に「歴史」と呼ばれる時間があると考えるわけですが、特にネット以後、そういった「歴史」を圧縮したり編集したりすることが、昔よりもずっとやり易くなりました。というよりも、そういう圧縮や編集が、どんどん勝手に起きてしまうようになった。何事かの歴史<sup>たど</sup>を辿る際に、どこかに起点を設定して、そこから現在に連なっていく、あるいは

現在から遡行していつて、はじまりに至る、ということではなくて、むしろ時間軸を抜きにして、それを一個の「塊」マッスとして、丸ごと捉えることが可能になった。そういう作業において、ネットは極めて有効なツールだと思います。

9 ただ、そのことによって、たとえば「体系的」という言葉の意味が、決定的に変わってしまった。フランス語で「歴史」histoireが「物語」histoire」という意味でもあるということは、もはや使い古されたクリシェです<sup>(注7)</sup>が、しかし「物語」としての

「歴史」の記述／把握という営みは、少なからず行なわれてきたし、今も行なわれている。もちろん実証的な観点から、そういうアプローチに対する批判もある。事実の連鎖は物語的な整合性やドラマツルギーとは必ずしも合致しないからです。しかしそれでも「歴史」を「物語」的に綴る／読むことはできてしまう。なぜならば、そこには「時間」が介在しているからです。過去から現在を経て未来へと流れてゆく「時間」というものが、そのあり方からして「物語」を要求してくる。「物語」とは因果性の別名です。だからひとは「歴史」を書くつもりで、ついつい「物語」を書いてしまう。

10 しかしネット以後、このような一種の系譜学的な知よりも、「歴史」全体を「塊」のように捉える、いわばホーリスティックな考え方がメインになってきたのではないかと思うのです。これはある意味では「歴史」の崩壊でもあります。まず「現在」という「扉」があつて、そこを開けると「塊」としての「歴史」がある。その「歴史」を大掴みに掴んでしまつて、それから隙間を少しずつモザイク状に埋めていくことが、「歴史」の把握の仕方としては、今やリアルなのではないかと思うのです。

11 先ほど「リテラシー」という言葉を出しましたが、リテラシーが機能していないと、何かをわかつてもらおうとしても空回りしてしまうことがあるので、最低限のリテラシーを形成するための啓蒙の必要性が、とりわけゼロ年代<sup>(注10)</sup>になってからよく語られるようになってきました。たとえば芸術にかんしても、ある作家や作品に対する価値判断に一定の正当性を持たせるためには、どうしても啓蒙という作業が必要になってくるという意見があります。時間軸に拘束されない、崩壊した「歴史」の捉え方が、九〇年代以後、少しずつメインになってきて、僕はそれは基本的に良いことだと思っていたのですが、ゼロ年代になると、その弊害も起こってきた。そのひとつの例が「意図的なバクリ」だったりします。だから、ここまでくると、啓蒙も必

要なのかもしれないという気持ちだが、僕にも多少は芽生えてきました。けれども、やはり僕自身は、できれば啓蒙は他の人に任せておきたいのです。啓蒙を得意とする、啓蒙という行為に何らかの責任の意識を持つている人たちがなさってくればよくて、僕はそれとは異なる次元にある、未知なるものへの好奇心／関心／興味を刺激することの方をやはりしたい。けれどもそれも今や受け手のリテラシーをある程度推し量りながらする必要がある。そこが難しい所であるわけですが。

(佐々木敦『未知との遭遇』による)

(注) 1 ツイッター——インターネットにおいて「ツイート」や「つぶやき」と呼ばれる短文を投稿・閲覧できるサービス。なお、閲覧し

たツイートに反応して投稿することを「リプライを飛ばす」という。

2 先ほども言ったように——本文より前のところで、類似の事柄に関する言及があったことを受けている。

3 「君の考えたことはとくに誰かが考えた問題」——本文より前のところで言及があった、インターネットにおいて顕著に見られる問題を指している。

4 パクリ——盗作を意味する俗語。「パクリ」という動詞の名詞形。

5 リテラシー——読み書き能力。転じて、ある分野に関する知識を活用する基礎的な能力。

6 閾値——限界値。「しきいち」とも読む。

7 クリシエ——決まり文句。

8 ドラマツルギ——作劇術、作劇法。

9 ホーリスティック——全体的、包括的。

10 ゼロ年代——西暦二〇〇〇年以降の最初の十年間。

問1

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1

5

(ア)

1  
タれる

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ ベートーヴェンにシンスイする  
④ 寝不足でスイマにおそわれる  
③ ブスイなるまいに閉口する  
② 親元を離れてジスイする  
① 鉄棒でケンスイをする

(イ)

2  
タイガイ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ ガイハクな知識を持つ  
④ 不正を行った者をダンガイする  
③ 制度がケイガイと化す  
② 故郷を思いカンガイにふける  
① 会議のガイヨウをまとめる

(ウ)

3  
ジュンタク

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ 水をジュンカンさせる装置  
④ 温暖でシツジュンな気候  
③ ジュンキョウシヤの碑  
② 夜間にジュンカイする警備員  
① ジュンドの高い金属

(エ)

4  
タンテキ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ タンセイして育てた盆栽  
④ コタンの境地を描いた小説  
③ ダイタンな意見の表明  
② 一連の事件のホツタン  
① 真相のあくなきタンキユウ

(オ)

5  
カナで

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ⑤ 事件のソウサが続く  
④ ソウガンキョウで鳥を観察する  
③ 在庫をイツソウする  
② 国王に意見をソウジョウする  
① 工場がソウギョウを再開する

問2

傍線部A「教えて君」よりも『教えてあげる君』の方が、場合によっては問題だと思えます」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

① 「教えてあげる君」は「教えて君」に対して無責任な回答をすることによって、質問をただ繰り返すばかりの「教えて君」の態度の安直さを許容してしまっているため、「教えて君」の知的レベルを著しく低下させる弊害をもたらすことにもなるから。

② 「教えてあげる君」は「教えて君」に知識を押しつけるばかりで、その時点での相手の知的レベルに応じた回答をしているわけではないため、「教えて君」をいたずらに困惑させてしまい、自らの教える行為を無意味なものにしてしまうことにもなるから。

③ 「教えてあげる君」は自身の知識を増やそうとすることがなく、「教えて君」の知的好奇心を新たに引き出すこともないため、「教えて君」もまた「教えてあげる君」と同様の状況に陥り、社会全体の知的レベルが向上していかないことにもなるから。

④ 「教えてあげる君」は社会全体の知的レベルを向上させなければならないという義務感にとらわれており、「教えて君」の向学心に直接働きかけようとして教えているわけではないため、自分自身の知的レベルが向上していかないことにもなるから。

⑤ 「教えてあげる君」は「教えて君」を導くことで得られる自己満足を目的として教えているに過ぎず、「教えて君」の知的レベルを向上させることには関心がないため、「教えて君」と「教えてあげる君」との応答がむだに続いてしまうことにもなるから。



問3

傍線部B「メロディを書く」とする音楽家にとっては、これはなかなか厳しい問題かもしれませんが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7

- ① 音楽家は、新しいメロディを作り出そうとして、豊富な音楽の知識を活用するが、逆にその知識が自由な発想を妨げてしまうため、誰もが口ずさめるような躍動感のあるメロディを生み出せなくなっているから。
- ② 音楽家は、新しい曲を作ることを期待されているが、多くの曲が作られてきたことで、自分が考え出したメロディに前例がある可能性が高くなるため、オリジナルな曲を作ることが困難になってきているから。
- ③ 音楽家は、新しい曲を発表することで社会的な認知を得ていくために、たえず新しい曲を発表しなければならず、過去のメロディを自作の一部として取り込むことが避けられなくなっているから。
- ④ 音楽家は、新しい曲を発表しても、社会に多くの曲が出回っているために、曲のオリジナリティを正当に評価されることが難しく、才能がある音楽家ほど不満を抱くことが多くなっているから。
- ⑤ 音楽家は、新しいメロディを思いついた時には、過去に作られたメロディとの違いを確認する必要があるため、過去の膨大な曲を確認する時間と労力が大きな負担になってきているから。

問4 傍線部C『歴史』の崩壊」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

① インターネットによる情報収集の普及にともない、過去の出来事と現在の出来事との類似性を探し出すことが簡便にできるようになったため、両者の本質的な違いに着目することによって得られる解釈を歴史と捉える理解の仕方が成り立たなくなってしまったということ。

② インターネットによる情報収集の普及にともない、累積された過去に内在する多様性を尊重することが要求されるようになったため、多くの出来事を因果関係から説明し、それらから構成された物語を歴史と捉える理解の仕方が人々に共有されなくなってしまったということ。

③ インターネットによる情報収集の普及にともない、過去の出来事を重要度の違いによって分類することができるようになったため、重要であるか否かを問題にすることなく等価なものとして拾い出された過去の出来事の集合体を歴史と捉える理解の仕方が根底から覆ってしまったということ。

④ インターネットによる情報収集の普及にともない、過去の個々の出来事を時間的な前後関係から離れて自由に結びつけられるようになったため、出来事を時間の流れに即してつなぐことで見いだされる因果関係を歴史と捉える理解の仕方が権威を失ってしまったということ。

⑤ インターネットによる情報収集の普及にともない、累積された膨大な情報を時間の流れに即して圧縮したり編集したりすることが容易になったため、時間的な前後関係や因果関係を超えて結びつく過去と現在とのつながりを歴史と捉える理解の仕方が通用しなくなってしまったということ。

問5 この文章全体を踏まえ、「啓蒙」という行為に対する筆者の考えをまとめたものとして最も適当なものを、次の①～⑤

のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

① 個々の事象の背後にある知の意味が変質し、累積された過去の知見が軽視される傾向にある現代では、教養を他者に分け与え価値判断の基準を整える啓蒙という行為の重要性は高まり続けている、と筆者は思っている。そのため、単に他者を啓蒙するだけにとどまらず、有効な啓蒙の方法を模索することも必要だと考えている。

② 膨大な情報に取り囲まれ、物事の判断基準が見失われた現代では、正当な価値判断を行うためのリテラシーを形成する啓蒙という行為の必要性は高まり続けている、と筆者は思っている。しかし、みずからその作業を率先して担うよりは、好奇心を呼び起こすことで人が自力で新たな表現を生み出すよう促す側に身を置き続けたいと考えている。

③ 知識を求める者と与える者との関係が容易に成立するようになり、自力で考えることの意義が低下した現代では、他者に知識を分け与える啓蒙という行為についての責任を特定の誰かが負う必要はなくなった、と筆者は思っている。しかし、新たな発想が生まれることを促すために、あえて他者を啓蒙する場にとどまり続けたいと考えている。

④ 過去に関する情報を容易に圧縮したり編集したりできるようになった結果、外部から影響されることなく独創的な芸術表現を行うことが困難になった現代では、故意による盗作行為を抑止する営みとしての啓蒙は不可欠である、と筆者は思っている。そのため、啓蒙という行為に積極的に関わることで人々の倫理意識を高めたいと考えている。

⑤ 長い歴史の中で累積された知見を自在に参照できるようになり、過去を振り返ることが求められつつある現代では、歴史を正しく把握する態度の大切さを人々に教える啓蒙という行為の意義は高まる一方である、と筆者は思っている。しかし、あえて啓蒙の意義を否定し、歴史の束縛から解放されることによって現状を打破すべきだと考えている。

問6 この文章の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑧のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 

|    |
|----|
| 10 |
|----|

 ・ 

|    |
|----|
| 11 |
|----|

 。

- ① 第1段落に出てくる「教えて君」「教えてあげる君」のような「君」付けの呼称は、それらの人たちに対する親しみではなく、軽いからかいの気持ちを示している。
- ② 第3段落の前半にある丁寧の助動詞「ます」がその段落の後半に出てなくなるのは、読み手に対する直接的な気配りよりも内容そのものの説明に重点が移っているからである。
- ③ 第4段落の末尾の文中にある「そのこと」という指示表現は、それを用いず「なぜかよく似てしまうことの方が」と続けた場合に比べて、次の段落への接続をより滑らかにする働きをしている。
- ④ 第5段落の後半になって「～ない」という打消し表現が目立つようになるのは、同じ話題に関する議論を深めるために、肯定の立場から否定の立場に転じて論じているからである。
- ⑤ 第7段落の第4文「しかし」も第2文に対して逆接関係にあることを示している。  
るが、どちらの「しかし」も第2文に対して逆接関係にあることを示している。
- ⑥ 第8段落の第1文になって初めて「歴史」という語を力ギカッコ付きで表示するようになったのは、従来の捉え方による歴史であることを際立たせるためである。
- ⑦ 第10段落の第2文「これはある意味では～あります。」の「ある意味では」という表現は、何か特定の内容を示すためではなく、一文全体を婉曲<sup>えんきよく</sup>な言い回しにするという働きをしている。
- ⑧ 第11段落の第7文「啓蒙を得意とする、～したい。」の中の「なさって」という尊敬表現によって示される敬意には、その対象となる人たちに対して距離を置こうとする働きが含まれている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

## 第2問

次の文章は、小池昌代こいけまさよの小説「石を愛めでる人」の全文である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

趣味といつてもいろいろあるが、山形さんの場合は、「石」であった。「石」を愛でることであつた。そのようなひとを、一般に「愛石家」と呼ぶらしい。愛猫家とか愛妻家とか、考えてみれば、世の中には何かを愛して一家を構えるほどの人が結構いる。しかしアイセキカと聞いて、即座に石を愛するひととは、ちよつと思ひ浮かばなかつた。

山形さんから「アイセキカ」友の会に入会しましたよ、と聞いたときは、えっ? 愛惜? と聞き返してしまつた。山形さんは、そのころ奥さんを、病気でなくしたばかりのころだつたから。山形さんが、石を愛するようになったのが、奥さんをなくしたと関係があるのかなのかは、よくわからない。

わざわざ表明したことはないが、実はわたしも石が好きである。どこかへ行くと、自分の思い出にと、石を持ち帰ることが今までにもよくあつた。

子供のころも、海や川へ行くと、小石を拾つては家に持ち帰つたが、当時は石よりも、石を持ち帰るという行為そのもののほうに、特別の意味があつたようだ。部屋に持ち込まれた石はきまつて急速に魅力を失ひ、がらくたの一つになつてしまつた。そもそも水辺にある小石は、川や海の水に濡ぬれているときは妙に魅力があるのに、乾いてしまうと、ただの石だ。濡れている色と乾いた色と、同じ石でも随分違う。水辺の石の魅力をつくっているものが、実は、石そのものでなく、水の力であつたということなのか。

今、わたしの机の上には、イタリアのアッシジで拾つてきた、大理石のかけらが四つある。イタリアの明るい陽ひに、きらきらと微妙な色の差を見せてくれた、薄紅、薄紫、ミルク色、薄茶の四つの石は、これは日本に持ち帰つても、不思議なことに色あせることがなかつた。

一人でいる夜、疲れて心がざらついているようなとき、その石をてのひらのなかでころがしてみる。石とわたしは、どこまで

も混ざりあわない。あくまでも石は石。わたしはわたしである。石のなかへわたしは入れず、石もわたしに、侵入してこない。その無機質で冷たい関係が、かえってわたしに、不思議な安らぎをあたえてくれる。

人間関係の疲労とは、行き交う言葉をめぐる疲労である。だから、<sup>A</sup>言葉を持たない石のような冷やかさが、その冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみる日々があるのだ。こうしてみると、わたしだって、充分、アイセキカの一人ではないか。

そういえば、生まれて初めて雑誌に投稿した詩が、「石ころ」というタイトルだった。夜の公園に残された石ころが、まるで、なにかをつかみそこねた、握りこぶしのように見えた。それだけのことを書いた幼稚な詩だったが。

子供のときは、道に石があれば、とりあえずは、足で蹴ってみた。武器として、なにものかに向かって投げつけたり、水のなかに意味もなく、ぼちゃつと落としてみたり、拾って、それに絵を描いてみたり、積み上げたり、地面に印のかわりに、置いてみたり……。石ころとは、随分、多方面に渡って、つきあってきたものだ。

ひとと石との、こうしたあらゆる関係の先に、石をただ見つめるという、アイセキカたちの、<sup>(ア)</sup>透明な行為がひろがっているのだろう。

さて、そのアイセキカ、山形さんは、普段も石のように無口なひとである。ある地方テレビ局の制作部門に勤務している。おいくつですか、と尋ねたことはないが、五十歳はとうに過ぎているはずだ。

山形さんの担当するインタビュー番組に、わたしが出演させてもらったのが知り合うきっかけだった。実はわたしは、テレビのない生活をして、十年くらいになる。見たい番組というのが、ほとんどないし、たまに、人の家でテレビがついていると、テレビとは、こんなに騒がしいものであったかとびっくりする(特にコマーシャルが、ひどい)。

わたし、テレビ持ってませんから。——しかしそれは出演を断る理由にはならなかった。

わたしはこんな仕事をしてますが、テレビを持ってないのは、今では普通のことです、と山形さんは言った。しかし、見るのと出るのでは、また違う。まあ、一度くらい、遊びにいらっしゃってはいかがです？

結局、その十五分番組に、わたしは出ることを決めた。オペラ歌手と評論家のインタビューを相手に、とても緊張しつつ、

一生懸命になって、詩のことをしゃべり、朗読までして、収録を終えたのだ。

終わったあと、暗い夜道を一人で帰りながら、テレビとは、恐ろしく、自分を消費するものだった。インタビューたちとの関係も、あまりにも希薄で一時的・図式的なものであり、そんなことは彼らにとって、仕事のひとつなのだから当たり前のことなのに、その当たり前のことに傷ついてしまった。

そのうえ、自分の言ったことが、終わったあと、わんわんと自分のなかで反響している。詩人という肩書きで得意になってしゃべった自分——これは一種の詐欺であると思った。そのことを自覚したうえで、玄人としてりっぱに騙されたのならそれでもいいが、わたしは半分素人の様な顔をして、詩とは……とか、詩との出会いは……なんて遠慮がちに、そのくせ内心、<sup>(イ)</sup>とくとくとしやべっていたのだから、なんだか、タチが悪いような気がした。

わたしのそんな落ち込みを、山形さんは、まあ、テレビに初めて出た人間はそんなもんですよ、と石のように表情のない顔で、のんびりとなぐさめてくれた。ここを通過するとね、もう怖くはありません。気をつけてくださいよ、テレビに出ることは、けっこう魅力があるようですからねえ。みんな、そう言いますよ。こいけさんもそのうちね——と山形さんは言った。——  
ぜったいテレビにどんどん出たくなりますよ。そう、自信を持って決めつけるのだった。

その山形さんから、「石を出品しましたので、ぜひごらんください」という、薄いぺらぺらのはがきの案内状が届いたのは、東京に梅雨入り宣言が出された日のことだった。さらに<sup>(ウ)</sup>追い討ちをかけて電話までかかってきて、石はいいですよ、ぜひ、見にきてくださいよ、何日と何日なら、わたしも行ってますから、と。

その、動かぬ大山のような山形さんの言い方には、断<sup>こと</sup>わられることなど、おのれの辞書にはないというようなずうずうしさがあつた。

55 「わかりました、じゃあ行きますよ(行けばいいんですよ)。わかりましたよ(まったくもう)」

このわたしの返答も、充分すぎるほど失礼な言い方ではあったが、山形さんは、ともかくもわたしが行くと答えると、うむ、と満足げにうなずいて日取りを決め、それじゃあ、と言って電話を切った。



**B**

当日は雨だった。しかし石を見に行くのにはいい日のように思われた。傘というものがわたしは好きだ。ひとりひとりの頭のうえに開き、ひとりひとりを囲んでいる傘が。そういえば、寂しい、独りきりの傘のなかを、華やかな世界と表現した女性の詩人がいたなあ。彼女もまた、雨の日と、傘が、好きだったのだろう。五十を過ぎて、彼女は突然自殺してしまった。顔に刻まれた深い皺<sup>しわ</sup>が、とりわけ素敵な美しいひとだった。

そんなことを思い出しながら、会場についた。表参道の小さなアトリエである。傘の露をふりはらって、ドアを開けた。期待したとおり、ずらっと小石どもが並んでいる。それぞれの石の前には、産地の名前と、出品者の名前が毛筆で書いてある。産地というのは、平たく言えば、石を拾った場所、出品者というのは、拾ったひとの名前だろう。そう考えると、石を愛するという趣味は、実にシンプルでいいものと思った。拾った、拾われた、その一瞬にすべてをかけて展示しているのであるから、ここにあるのは、どれもが人生の瞬間芸のようなものだと言える。

入り口のところには、パンフレットがあつて、そのなかに「水石の魅力」という短い文章が書かれてあつた。ただの石だと思っていたが、こういうのを、水石<sup>すいせき</sup>というらしい。始めて知った言葉である。

ここは、まるで、河原のようなところだ。石ばかりでなく、言葉も拾うのだ。さつそく、パンフレットを読んでみた。

「水石は、趣味のなかでも、もつとも深淵<sup>しんえん</sup>で奥の深いものだといわれています。盆栽などとあわせて鑑賞されることも多いのです。

庭石のような大きなものでなく、片手で持てるような小さな鑑賞石をいいます。あなたも、水石の世界に、どうぞひととき、お遊びください」

アトリエは薄暗く、それぞれの石に、柔らかなスポットライトが当てられている。ひとの姿も二、三、ある。どのひと、み

な、一人ぼっちである。石が好きなのだろうか。彼らもまた、アトリエ内に、飛び石のように、存在している。

そこへドアが開いて、山形さんが入ってきた。

(ああ、山形さんだ)

とわたしは思った。思っただけで、声にはならなかった。

(山形さん、わたし、来ましたよ)

これもまた、声にならず、表情だけで、山形さんに訴えることになった。まるで石が、あらゆる声を吸いとってしまったようである。

85

山形さんも、わたしにすぐに気がついてくれたが、山形さんも、声を出さない。目を細くして、

(ああ、よく来てくれました、むし暑いのに、悪かったですね。ゆっくり見ていってくださいよ、あとでお茶でもいいかがですか)

そんなことを言う。違うかもしれない。でも、そのときは、きっとそんな気がしたのである。

沈黙の空気を味わいながら、わたしは、いつしか、山形さんが出品した石の前にいた。

90

まるまるとした真っ黒な楕円形<sup>だえんけい</sup>。滋賀県瀬田川・山形寛。そんな文字がプレートに書いてある。じっと見てみると、背後か

ら、

「よく来てくれましたね、暑いのに」

と声がした。山形さんだ。なんだかすでに聞いたような言葉をしゃべっている。

95

その、確かに実在する男の声は、不思議な浸透力を持ってわたしの身体に入ってきた。久しぶりにひとの声を聞いたと思った。まるで、ついさっきまで、わたしは石であり、その声によって、ようやく人間に戻ったというような、どこかほっとする、あたたかい声だった。

山形さんの顔は、日に焼けて、真っ黒だ。おまけに、何をしていたのか、汗だらけの顔である。目があった。出品された石

と、良く似た漆黒の瞳である。雨が降っているせいか、しっとりとしている。こんな目を山形さんは持っていたのだろうか。決して強い目というのではない。疲れはてていて、むしろ気弱な目だ。こんな目を山形さんはしていたのだろうか。石に惹かれて  
いる山形さんが、そのとき少しだけ、わかったような気がした。

自分でもにわかには信じられないことだが、わたしもそのとき、山形さんに、心を惹かれていたのかもしれない。C 何かが  
何かを少しずつひっぱっている、その日は、そんな感じの日であった。

それから、ドアを押して外に出た。雨はまだ降っている。

「この先のビルの二階に、できたばかりの洋風の居酒屋があるんです。石を見たあとの一杯もいいですよ」  
何も答えないでいると、

(じゃあ、いきましよう)

と、山形さんが言った(ように思った)。

言葉を使わないと、わたしたちもまた、石のようなものだ。何を考えているか、わからない。互いにくらべていくほかはない。石もひとつも。ころがり、ぶつかりあって、わかりあうしかない。そう考えながら歩いていくと、

「いいですよ」

と山形さんが立ち止まる。古いビルディングの前である。それからくるつと背中を見せ、細く暗い階段をのぼっていった。わたしも彼の後に続いた。

足元がようやく確かめられるほどの、ぼんやりとした光線がふりそそいでいる。いま、この階段をのぼっていることを、覚えておこうとわたしは思った。やがて山形さんが、店のドアを押す。中から、サククスとピアノの音が、あふれるように、外へ流れ出た。

問 1 傍線部(ア)と(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 と 14。

- (ア) 12 透明な
- |       |      |         |       |         |
|-------|------|---------|-------|---------|
| ⑤     | ④    | ③       | ②     | ①       |
| 暗さのない | 形のない | まじり気のない | 悪意のない | ぬくもりのない |

- (イ) とくどくと 13
- |           |            |          |        |       |
|-----------|------------|----------|--------|-------|
| ⑤         | ④          | ③        | ②      | ①     |
| いかにも得意そうに | 始めから順番どおりに | 利害を考えながら | 充分満足して | 意欲満々で |

- (ウ) 追い討ちをかけて 14
- |         |         |           |         |           |
|---------|---------|-----------|---------|-----------|
| ⑤       | ④       | ③         | ②       | ①         |
| わざわざ調べて | 時間の見境なく | しつこく働きかけて | 強く責め立てて | 無理に付きまとって |

問2

傍線部A「言葉を持たない石のような冷やかさが、その冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 周囲の人の慰めや励ましより、物言わぬ石がもたらす緊張感の方が、自分が確かな存在であることを実感させ、それが人としての自信を取り戻させてくれるということ。
- ② 石と互いに干渉せずに向き合うことは、言葉を交わす人間関係の煩わしさに疲れていらだった心を癒やし、ほっとするような孤独を感じさせてくれるということ。
- ③ 物言わぬ石の持つきびしい拒絶感に触れることで、今では失ってしまった、周囲の人との心の通い合いの大切さがかえって切実に思えてくるということ。
- ④ 現実の生活では時に嘘をつき自分を偽ることがあるのに対し、物言わぬ石と感覚を同化させていく時は、虚飾のない本当の自分を強く実感できるということ。
- ⑤ 乾いて色あせてしまった水辺の石でも、距離を置いて見つめ直してみることによって、他人の言葉に傷ついたわたしを静かに慰めてくれるように思えてくるということ。

問3

わたしの山形さんへの見方は、この文章全体を通してみると変わっていくが、29行目から57行目までに描かれた山形さんの人物像はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいるわたしを励まし、テレビ業界の魅力を説くことで希望を与えてくれる明るさを持つ一方で、繊細な内面に凶々しく入り込んでくる人物。
- ② 初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいるわたしにテレビ出演の楽しさを説いて自信を持たせようとする度量の大きさを持つ反面、自分の要求はすべて通さずにはいられない人物。
- ③ 初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいるわたしを無表情なままに慰めてくれる不思議な優しさを持ちながら、揺るぎない態度でわたしの心情や行動を決めてかかる強引な人物。
- ④ テレビの仕事で自己嫌悪に陥ったわたしの心を気遣うふりをして、自身の趣味である石の魅力に引き込もうとする自信家であり、わたしの戸惑いをくみ取ろうとしない無神経な人物。
- ⑤ テレビの仕事で自己嫌悪に陥ったわたしの心を見通したうえで話題をそらしてごまかし、当初のインタビューとは関係のない個人的な趣味の世界に引き込もうとする無責任な人物。

問 4

傍線部 B「当日は雨だった。しかし石を見に行くのにはいい日のように思われた。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

17

① わたしは今までも水辺の石を持ち帰ったりすることがあった。この日は雨が降っており、様々な状況によって魅力を増す石を観賞したくなる雰囲気だと感じられ、しかも、傘が石と同じように自分だけの世界を心地よいものにしてくれるように思われたから。

② わたしにとって、石と傘は見方によって様々に姿を変えるため、これまでも気分を高揚させる鑑賞対象だった。そのうえ、河原のようなアトリエにも水石の世界があることを知ってから、石の魅力を味わううえで、雨が思わぬ演出効果をもたらすと気づいたから。

③ わたしが以前から好きだった女性詩人の顔の皺には精神的な陰影が刻まれ、水や光によって微妙に表情を変える石に似た魅力があった。この日は雨が降っていたので、五十を過ぎて自殺した彼女も傘を愛していたことを思い出し、孤独な詩人としての共感を覚えたから。

④ わたしは日頃から、はじめじめした人間関係の悩みを忘れさせてくれる乾いた石に愛着を覚えていた。しかし、テレビに出演して自己嫌悪に陥ってからは、濡れた石や雨が自分の心を慰め、傘もまた一人一人の孤独な空間を守ってくれるように感じられたから。

⑤ わたしは亡くなった女性詩人と同じように、昔から誰にも邪魔されない孤独を愛していたため、傘に囲まれた空間に安らぎを感じている。そのため、雨の日はかえって外出の億劫さが和らぎ、他人の目を気にせず石を見に行くことができる気がしたから。

問5

傍線部C「何かが何かを少しずつひっばっている、その日は、そんな感じの日であった。」とあるが、わたしはどのようなことを感じはじめているのか。わたしの中で起こった変化を踏まえた説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 強引で何事にも動じない山形さんが、一方では疲れて自信のない人物でもあったことにわたしは意外さを覚えていた。強さと弱さが同居した山形さんの人間としての奥行きを垣間見たわたしが、自分にもそうした両面があることを発見し、石との出会いを契機として似たもの同士の孤独な二人が惹かれ合っていることを感じはじめていた。

② 冷たい石と向き合う沈黙のひとときに安らぎを感じていたわたしが、山形さんの声は違和感なく受け入れられたことに意外な安堵<sup>あんど</sup>を覚えていた。山形さんのしっとりとした瞳の中に弱さを発見したわたしは、山形さんとの人間らしい相互関係を自覚し、石を媒介として二人の心の距離が近付きつつあることを感じはじめていた。

③ 石が水の湿り気を得て輝きを増すように、山形さんの生身の声がわたしの身体に浸透し、人間関係に疲れ切ったわたしを生き生きとさせたことに驚いている。寡黙な山形さんに石の世界のおもしろさを教えられ、彼の見識の高さに感動したわたしは、自分も同じように石を出品してみたいと感じはじめていた。

④ 山形さんの落ち着いた人柄に惹かれ、石ではなく生身の人間である山形さんに愛情が芽生えはじめたことにわたしは驚いている。山形さんが石を愛するようになったことで孤独から脱するきっかけを得たように、山形さんとの接触が、わたしを今までの自分とは違う人間に変えるかもしれないと感じはじめていた。

⑤ 言葉を介した人間関係に困難を感じていたからこそ保たれていた石との関係が、穏やかな山形さんと関わるうちに少しずつ壊れてきていることにわたしは気づいている。静まりかえったアトリエの中で生身の人間との言葉による心の交流が成立した結果、孤独な詩人であることから脱しつつあることを感じはじめていた。



問 6

この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。  
解答番号は

19

20

- ① 「愛石家」という語は、3行目から29行目まで一貫して「アイセキカ」とカタカナ表記である。3行目と4行目の「アイセキカ」はわたしが意味を取れずに音だけ理解したことを示しており、これ以後の「アイセキカ」は漢字表記の「愛石家」の意味に限定されないことを表している。
- ② 山形さんについては一貫して「山形さん」という表記がなされ、わたしの名前については48行目で「こいけさん」というひらがな表記がなされている。48行目の「こいけさん」は、ここでの山形さんの語りかけが、わたしの後悔を他人事として突き放すような、投げやりなものであることを表している。
- ③ 63行目の「小石ども」の「ども」は、通常、名詞の後ろに付いてそれを見下す気持ちを表す。この場面で「小石」に「ども」を使用しているのは、わたしが子供の頃、石を好き勝手に扱ったことを受けており、他人が拾った「小石」を軽んじる気持ちが生じたことを表している。
- ④ 98行目には「こんな目を山形さんは持っていたのだろうか」、99行目には「こんな目を山形さんはしていたのだろうか」と、類似の表現が連続して出てくる。これはわたしが山形さんに徐々に惹かれていくにつれて、石からは次第に心が離れつつあることを表している。
- ⑤ 77行目以降最後まで、山形さんとわたしが発する言葉には、カッコで示されるものとカギカッコで示されるものがある。カッコを使うものはわたしの思念や、わたしが山形さんの思念を推測したものを表しているが、カギカッコを使うものはわたしにはつきり届いた声であることを表している。
- ⑥ 114行目の「サックスとピアノの音が、あふれるように、外へ流れ出た」に使われている「あふれる」「流れ出る」という動詞は、通常「サックスとピアノの音」のような主語には使われないものである。ここではこれらの動詞を「音」に対して使うことによって、詩人であるわたしの表現技巧が以前と比べて洗練されたことを表している。

### 第3問

次の文章は『夢の通ひ路物語』の一節である。男君と女君は、人目を忍んで逢う仲であつた。やがて、女君は男君の子を身ごもつたが、帝に召されて女御となり、男児を出産した。生まれた子は皇子(本文では「御子」)として披露され、女君は秘密を抱えておののきつつも、男君のことを思い続けている。その子を自分の子と確信する男君は人知れず苦悩しながら宮仕えし、二人の仲介役である清さだと右近も心を痛めている。以下の文章は、それに続くものである。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

かたみに恋しう思し添ふことさまざまなれど、夢ならで通ひぬべき身ならねば、現の頼め絶えぬる心憂さのみ思しつづけ、大空をのみうち眺めつつ、もの心細く思しわたりけり。男の御心には、まして恨めしう、あぢきなき嘆きに添へて、御子の御気配もいとつつましう、鏡の影もをさをさ覚ゆれば、いよいよ「あきらめてしがな」と思しわたれど、ありしやうに語らひ人さへ聞こえねば、「人わろく、今さらかかづらひ、をこなるものに思ひまどはれむか」と心置かれて、清さだにだにも御心とけものたまはず、いとどしき御物思ひをぞし給ひける。

こなたにも御心に絶えず思し嘆けど、何かは漏らし給はむ。御宿直などうちしきり、おのづから御前がちにて、御ころざしのになきさまになりまさるも、よに心憂く、恐ろしう、人知れず悩ましう思して、いささか御局に下り給へり。人少なう、しめやかにながめ給へる夕暮れに、右近、御側に参りて、御かしらなど参るついで、かの御事をほのかに聞こえ奉る。

「この程見奉りしに、御方々思しわづらふもむべに侍り。げに痩せ痩せとならせ給ひ、こよなく御色のさ青に見奉り候ひぬ。清さだも、久しううちおこたり侍りしを、いかに思しとぢめけむと、日頃いぶかしう、恐ろしう思ひ給へられしに、なほ忍びはて給はぬにや、昨日文おこせし中に、かかるものなむ侍りける。『まことに、うち悩み給ふこと、日数へて言ふ甲斐なく、見奉るも心苦しう。東宮のいとかなしうまつはさせ給へば、とけても籠らせ給はぬを、この頃こそ、えうちつづきても参り給はで、ひとへに悩みまさらせ給へ』と侍りし」

とて、御消息取<sup>と</sup>う出たれど、なかなか心憂く、そら恐ろしきに、

「いかで、かくは言ふにかあらむ」

とて、泣き給ひぬ。

「こたびは、とちめにも侍らむ。御覽せざらむは、罪深きことにこそ思はさめ」  
とて、うち泣きて、

「昔ながらの御ありさまならましかば、かくひき違<sup>たが</sup>ひ、いづこにも苦しき御心の添ふべきや」  
と、忍びても聞こゆれば、**X** いとど恥づかしう、げに悲しくて、振り捨てやらで御覽す。

**A** 「さりとともと頼めし甲斐もなきあとに世のつねならぬながめだにせよ

(注8)

(注9)

雲居のよそに見奉り、さるものの音調べし夕べより、心地も乱れ、悩ましう思ひ、給<sup>く</sup>へしに、ほどなく魂の憂き身を捨てて、君があたり迷ひ出<sup>い</sup>でなば、結びとめ給へかし。惜しけくあらぬ命も、まだ絶えはてねば」

など、あはれに、つねよりはいとど見所ありて書きすさみ給ふを御覽するに、来<sup>き</sup>し方行く先みなかきくれて、御袖いたう濡<sup>ぬ</sup>らし給ふ。うち臥<sup>ふ</sup>し給へるを、見奉るもいとほしう、「いかなりし世の御契りにや」と、思ひ嘆くめり。

「人目なき程に、あはれ、御返しを」

と聞こゆれば、御心も慌<sup>あわただ</sup>しくて、

**B** 「思はずも隔てしほどを嘆きてはもろともにこそ消えもはてなめ

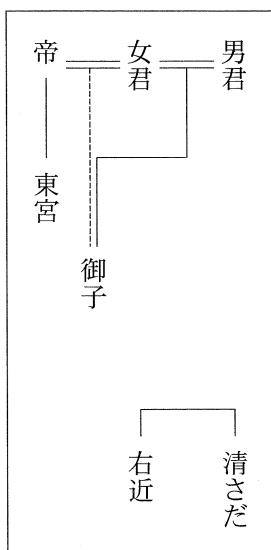
遅るべうは」

とばかり、書かせ給ひても、え引き結び給はで、深く思し惑ひて泣き入り給ふ。「かやうにこと少なく、節<sup>ふし</sup>なきものから、いとどあはれにもいとほしうも御覽せむ」と、**Y** 方々<sup>かたがた</sup>思ひやるにも、悲しう見奉りぬ。

(注)

- 1 鏡の影もをさをさ覚ゆれば——鏡に映った男君自身の顔も御子の顔にそっくりなので、ということ。
- 2 語らひ人——相談相手となる人。ここでは女君の侍女の右近を指す。
- 3 清さだ——男君の腹心の従者。右近とはきょうだい。
- 4 御宿直などうちしきり——女君が帝の寢所にたびたび召されて、ということ。
- 5 御方々——男君の両親。
- 6 いかに思しとちめけむ——どのようにあきらめなされたのだろうか、ということ。
- 7 東宮——帝の子。
- 8 雲居のよそに見奉り——女君が入内して男君の手の届かないところに行ってしまった、ということ。
- 9 さるものの音調べしタベ——男君はかつて帝と女君の御前で、御簾を隔てて笛を披露したことがあった。そのときのことを指す。

人物関係図 (-----は表向きの親子関係)



問 1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

～

23

。

(ア)

あぢきなき嘆き

21

- ① 頼りない仲介役二人への落胆  
② 御子に対する限りない憐れみ<sup>あわ</sup>  
③ 帝に対する押さえがたい憎しみ  
④ 女君へのどうにもならない恋の苦悩  
⑤ ふがいない自分自身へのいらだち

(イ)

あきらめてしがな

22

- ① 宮仕えを辞めてしまいたい  
② 真実をはっきりさせたい  
③ 思いを断ち切りたい  
④ 胸の内を聞いてほしい  
⑤ 私のことを忘れてほしい

(ウ)

御こころざしのになきさまになりまさる

23

- ① 帝のご愛情がこの上なく深くなっていく  
② 帝のご寵愛<sup>ちようあい</sup>がいつそう分不相応になっていく  
③ 帝のお気持ちがいよいよ負担になっていく  
④ 帝のお気遣いがますます細やかになっていく  
⑤ 帝のお疑いが今まで以上に強くなっていく

問2 波線部 a、c の敬語の説明の組合せとして正しいものを、次の ①、⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は

24

- |                                                                                         |                                                                                         |                                                                                         |                                                                                         |                                                                                         |
|-----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| ⑤                                                                                       | ④                                                                                       | ③                                                                                       | ②                                                                                       | ①                                                                                       |
| <p>c …… 男君から女君への敬意を示す謙讓語</p> <p>b …… 清さだから男君への敬意を示す尊敬語</p> <p>a …… 右近から女君への敬意を示す丁寧語</p> | <p>c …… 男君から女君への敬意を示す尊敬語</p> <p>b …… 清さだから男君への敬意を示す尊敬語</p> <p>a …… 右近から男君への敬意を示す謙讓語</p> | <p>c …… 男君から女君への敬意を示す謙讓語</p> <p>b …… 御方々から男君への敬意を示す尊敬語</p> <p>a …… 右近から男君への敬意を示す謙讓語</p> | <p>c …… 男君から女君への敬意を示す尊敬語</p> <p>b …… 御方々から男君への敬意を示す尊敬語</p> <p>a …… 右近から女君への敬意を示す丁寧語</p> | <p>a …… 右近から女君への敬意を示す丁寧語</p> <p>b …… 御方々から男君への敬意を示す尊敬語</p> <p>c …… 男君から女君への敬意を示す謙讓語</p> |

問3

傍線部X「いとど恥づかしう、げに悲しくて」とあるが、このときの女君の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

- ① 右近に、男君の病状が悪くなったのは自分のせいだと責められて恥ずかしくなり、また、男君が自分への気持ちをあきらめきれずに手紙をよこしたと告げられて、悲しく感じている。
- ② 右近に、仲介役とはいえ世に秘めた二人の仲を詳しく知られて恥ずかしくなり、また、右近が声をひそめて話すことから二人の仲が公にできないと思知らされて、悲しく感じている。
- ③ 右近に、男君からの手紙を見ないのは罪作りなことだと諭されて恥ずかしくなり、また、昔の間柄のままであったら二人とも苦しまなかったらうと言われて、悲しく感じている。
- ④ 右近に、死を目前にした男君が送ってきた罪深い内容の手紙を渡されて恥ずかしくなり、また、男君の姿が元氣だった頃とは一変したので心苦しいと嘆かれて、悲しく感じている。
- ⑤ 右近に、子どもの面倒を見ないのは罪深いことだと説かれて恥ずかしくなり、また、子どもさえなければ帝も男君もここまで苦しまなかったらうと咎められて、悲しく感じている。

問4 本文中の手紙A(男君の手紙)、手紙B(女君の手紙)の内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は

26

① 男君は、私が生きる甲斐もなく死んだら悲しんでほしいと思うが、迷い出そうな魂もあなたのことを考えるとこの身にとどまって死にきれない、と言っている。それに対して、女君は、あなたと離れてしまったことが苦しく、あなたに遅れず私もこの嘆きとともに消えてしまいたい、と応えている。

② 男君は、あなたに逢えずに死んだらせめて心を痛めることだけでもしてほしいが、死にきれないので私を受け入れてはくれないものか、と言っている。それに対して、女君は、もはやあなたを愛することはできないが、前世からの因縁と思えばつらく、一緒に死んでしまいたい、と応えている。

③ 男君は、私は逢瀬の期待もむなく死ぬだろうが、それまでに魂がこの身から離れてあなたのもとにさまよい出たときは引き留めてほしい、と言っている。それに対して、女君は、心ならずも離ればなれになってしまったことが悲しく、あなたが死んだら私も死に遅れはしない、と応えている。

④ 男君は、あなたを恨みながら死ぬだろうが、そのときには魂を引き留めて、誰のせいであんなにか悩んでほしい、と言っている。それに対して、女君は、意に反してあなたと距離ができてしまったことが情けなく、あなたが死んだら私も遅れずに死ぬから待っていてほしい、と応えている。

⑤ 男君は、私がこのまま死んだら、私のことを思って空を眺めてほしい、そうすれば魂はあなたのもとに行くので、そばに置いてほしい、と言っている。それに対して、女君は、今逢えないことでさえもどかしく、あなたが死んだら魂の訪れなど待たずに私も消えてしまいたい、と応えている。



問5

傍線部Y「<sup>かたがた</sup>方々思ひやるにも、悲しう見奉りぬ」とあるが、このときの右近の心情の説明として最も適当なものを、次の

- ① ～ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 女君は立場上、簡単な手紙しか書けないが、気持ちは男君にきつと伝わるだろうと、離ればなれになった二人を思つては、悲しく感じている。
- ② 病のせいで言葉少ない男君の手紙を見て、女君はいつそう気の毒に思っているだろうと、二人のやりとりを振り返つては、悲しく感じている。
- ③ 言葉足らずの女君の手紙を見て、男君は女君をいとしく思いつつもいよいよ落胆するだろうと、二人の別れを予感しては、悲しく感じている。
- ④ 短く書くことしかできない女君の手紙を見て、男君はさらに女君への思いを募らせるだろうと、二人の気持ちを考え、悲しく感じている。
- ⑤ 控えめな人柄がうかがえる女君の手紙を見れば、男君は女君への愛をますます深めるだろうと、二人の将来を危ぶんでは、悲しく感じている。

問6

この文章の内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

28。

- ① 男君は、女君のことを恋しく思い続けているが、未練がましく言い寄っても女君が不快に思うのではと恐れて、誰にも本心を打ち明けられず、悩みを深めていた。
- ② 女君は、男君への思いを隠したまま、帝と過ごす時間が長くなっていくことに堪えられず、ついには人目を忍んで男君への手紙を右近に取り次がせようとした。
- ③ 清さだは、右近から手紙が来ないことを不審に思い、帝が真相に気づいたのではないかと心配になり、事情を知らせるようにと、急いで右近に手紙を送った。
- ④ 男君は、女君への思いに加えて、東宮のもとに無理に出仕をしたため病気が重くなり、男君の様子を清さだから聞いた女君は、男君は死ぬに違いないと思った。
- ⑤ 女君は、男君の手紙を見せられて恐ろしく感じ、手紙を取り次いだ右近を前に当惑して泣いたが、無視もできずに手紙を読んだところ、絶望的な気持ちになった。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

# 第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。なお、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。(配点 50)

家蓄<sup>ニ</sup>一老狸奴<sup>(注1)</sup>。將<sup>ア</sup>誕<sup>ウ</sup>子<sup>ヲ</sup>矣<sup>(a)</sup>。一女童誤<sup>リ</sup>触<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>而墮<sup>ス</sup>。日夕鳴<sup>(注2)</sup>

鳴<sup>を</sup>然<sup>ゼン</sup>。会有<sup>タリ</sup>下<sup>タ</sup>餽<sup>リ</sup>兩小狸奴<sup>オクル</sup>者<sup>ヲ</sup>。其始<sup>ノ</sup>蓋<sup>メ</sup>漠<sup>シ</sup>然<sup>(注3)</sup>不<sup>ニ</sup>相<sup>ヒ</sup>能<sup>ユクセ</sup>也。老狸奴<sup>ナル</sup>

者、從<sup>ヒテ</sup>而撫<sup>ブシ</sup>之<sup>ヲ</sup>。徬徨<sup>(注4)</sup>焉<sup>エン</sup>。躑躅<sup>チヨク</sup>焉<sup>エン</sup>。臥<sup>スレバ</sup>則擁<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。行<sup>ケバ</sup>則翊<sup>タスク</sup>之<sup>ヲ</sup>。舐<sup>ナメテ</sup>其<sup>ノ</sup>舐<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>舐<sup>(注5)</sup>

而讓<sup>ル</sup>之<sup>ニ</sup>食<sup>ヲ</sup>。兩小狸奴<sup>ナル</sup>者、亦<sup>モ</sup>久<sup>シク</sup>而相<sup>ヒ</sup>忘<sup>ル</sup>也。稍<sup>ヤウヤク</sup>即<sup>ツキ</sup>之<sup>ニ</sup>遂<sup>ニ</sup>承<sup>(1)</sup>其<sup>ノ</sup>乳<sup>ヲ</sup>

焉<sup>(イ)</sup>。自<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>欣<sup>キン</sup>然<sup>ゼン</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>良<sup>ニ</sup>己<sup>ニ</sup>之母<sup>ナリト</sup>。老狸奴<sup>ナル</sup>者、亦<sup>モ</sup>居<sup>タ</sup>然<sup>(注7)</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>良<sup>ニ</sup>己<sup>ガ</sup>

出<sup>ダスト</sup>也<sup>(b)</sup>。吁<sup>アア</sup>亦<sup>タ</sup>異<sup>ナル</sup>哉<sup>カナ</sup>。

昔、漢<sup>ノ</sup>明<sup>(注8)</sup>德馬后<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>子。顯宗<sup>(注9)</sup>取<sup>リ</sup>他<sup>ノ</sup>人<sup>ジン</sup>子<sup>シヲ</sup>命<sup>ジテ</sup>養<sup>ハシ</sup>之<sup>ヲ</sup>曰<sup>ハク</sup>人子何<sup>B</sup>

必親生<sup>ニ</sup>。但恨<sup>ム</sup>愛<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>至<sup>ラ</sup>耳<sup>(c)</sup>。后遂<sup>ニ</sup>尽<sup>クシテ</sup>心撫<sup>シ</sup>育<sup>シテ</sup>而章帝<sup>モ</sup>亦<sup>タ</sup>恩<sup>(注10)</sup>性

天至<sup>タリ</sup>。母子慈孝<sup>ノ</sup>始終無<sup>シ</sup>纖芥<sup>センカイ</sup>之間<sup>ノ</sup>。狸奴之事<sup>(2)</sup>適<sup>リ</sup>有<sup>レ</sup>契<sup>カナフ</sup>焉<sup>(d)</sup>。然<sup>シカラバ</sup>

則<sup>チ</sup>世<sup>C</sup>之<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>人親与<sup>レ</sup>子、而有<sup>ニ</sup>不慈不孝者、豈独愧<sup>ニ</sup>于古人<sup>一</sup>。亦<sup>タ</sup>

愧<sup>ハツル</sup>  
此<sup>、</sup>異類<sup>ニ(e)</sup>已<sup>。</sup>

(程敏政『篁墩文集』による)

(注) 1 狸奴——猫。

2 嗚嗚然——嘆き悲しんで鳴くさま。

3 漠然——無関心なさま。

4 徬徨焉、躑躅焉——うろうろしたり足踏みをしたりして、落ち着かないさま。

5 氄——うぶ毛。

6 欣然——よろこぶさま。

7 居然——やすらかなさま。

8 明德馬后——後漢の第二代明帝(顯宗)の皇后。第三代章帝の養母。

9 顯宗取<sup>ニ</sup>他人子<sup>一</sup>、命養<sup>レ</sup>之——顯宗が他の妃の子を引き取って、明德馬后に養育を託したことをいう。

10 恩性天至——親に対する愛情が、自然にそなわっていること。

11 無<sup>ニ</sup>纖芥之間<sup>一</sup>——わずかな隔たりさえないこと。

問 1 傍線部(1)「承」・(2)「適」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。 解答

番号は 29 . 30。

(1) 「承」

29

- ⑤ 授けた  
④ 認識した  
③ 納得した  
② 差し出した  
⑤ 受け入れた

(2) 「適」

30

- ⑤ ゆくゆく  
④ わずかに  
③ ちょうど  
④ ほとんど  
⑤ かならず

問  
2

二重傍線部(ア)「将」・(イ)「自」と同じ読み方をするものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 

|    |
|----|
| 31 |
|----|

 ・ 

|    |
|----|
| 32 |
|----|

 。

番号は

31

2

32

Q

解答

(1)

32 一直

⑤ ④ ③ ② ①

雖 從 每 以 如

(ア)

31 将

⑤ ④ ③ ② ①

須 且 応 盡 当

問3 波線部(a)「矣」・(b)「也」・(c)「耳」・(d)「焉」・(e)「已」の説明の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選べ。解答番号は 33。

- ① (a)「矣」は「かな」と読み、詠嘆の意味を添え、(b)「也」は「なり」と読み、断定の意味を添える。
- ② (a)「矣」は「かな」と読み、感動の意味を添え、(e)「已」は「のみ」と読み、限定の意味を添える。
- ③ (b)「也」は「なり」と読み、伝聞の意味を添え、(c)「耳」は「のみ」と読み、限定の意味を添える。
- ④ (c)「耳」は「のみ」と読み、限定の意味を添え、(d)「焉」は文末の置き字で、断定の意味を添える。
- ⑤ (d)「焉」は文末の置き字で、意志の意味を添え、(e)「已」は「のみ」と読み、限定の意味を添える。



問 4

傍線部 A「吁、亦異哉」とあるが、筆者がそのように述べる理由の説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① 子猫たちと出会った時は「鳴鳴然」としていた老猫が、「欣然」と子猫たちと戯れる姿を見せるようになったため。
- ② 互いに「漠然」として親子であることを忘れていた猫たちが、最後には「居然」と本来の関係をとりもどしたため。
- ③ 老猫と出会った初めは「漠然」としていた子猫たちが、ついには「欣然」と老猫のことを慕うようになったため。
- ④ 子猫たちが「居然」として老猫になつき、老猫も「鳴鳴然」たる深い悲しみを乗り越えることができたため。
- ⑤ 子猫たちが「欣然」と戯れる一方で、老猫は「居然」たるさまを装いながらも深い悲しみを隠しきれずにいるため。

問5 傍線部B「人子何必親生」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① 子というものは、いつまでも親元にいるべきではない。
- ② 子というものは、必ずしも親の思い通りにはならない。
- ③ 子というものは、どのようにして育ててゆけば良いのか。
- ④ 子というものは、自分で産んだかどうかが大事なのではない。
- ⑤ 子というものは、いつまでも親の気を引きたいものだ。

問 6

傍線部 C「世之為人親与子、而有不慈不孝者、豈独愧于古人」の書き下し文として最も適当なものを、次の①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

- ① 世の人親<sup>じんしん</sup>と子との為にして、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人のみを愧<sup>は</sup>づかしめんや
- ② 世の人親の子に与ふと為すも、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人に愧づるのみならんや
- ③ 世の人親の子に与ふるが為に、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人のみを愧づかしめんや
- ④ 世の人親と子との為にするも、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人のみを愧づかしめんや
- ⑤ 世の人親と子と為りて、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人に愧づるのみならんや

問7

この文章全体から読み取れる筆者の考えの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は  
37  
。

- ① 猫の親子でも家族の危機を乗り越え、たくましく生きている。悲嘆のあまり人間本来の姿を見失った親子も、古人が言うように互いの愛情によって立ち直ると信じたものだ。
- ② 血のつながらない猫同士でさえ実の親子ほどに強く結ばれることがある。人でありながら互いに愛情を抱きあえない親子がいることは、古人はおろか猫の例にも及ばないほど嘆かわしいものだ。
- ③ 子猫たちとの心あたたまる交流によっても、ついに老猫の悲しみは癒やされることはなかった。我が子を思う親の愛情は、古人が示したように何にもたえようがないほど深いものだ。
- ④ 老猫は子猫たちを憐れ<sup>あわ</sup>んで献身的に養育し、子猫たちも心から老猫になつく。その一方で、古人のように素直になれず、愛情がすれ違う昨今の親子を見ると、誠にいたたまれなくなるものだ。
- ⑤ もらわれてきた子猫でさえ老猫に対して孝心を抱く。これに反して、成長しても肉親の愛情に恩義を感じない子がいることは、古人に顔向けできないほど恥ずかしいものだ。